

石川県立看護大学

ISHIKAWA PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY

IPNU キャンパスネット



2004.3 MAR. Vol. 5



『さくら』(宝達登山道)
でらうち てつじょう
パステル画/寺内 徹乗(第1期生)

目次

大学の主な動き	2~5	中国からの研修生の感想	6
第1回卒業式	2	キャンパスライフ	6~7
卒業生の言葉	3	一年を振り返って	6
卒業研究発表会	4	実習をとおして	7
大学祭	4	旅をとおして	7
退官記念講演会	5	図書館から	8
新任教員紹介	5	地域ケア総合センターから	8



石川県立看護大学

ISHIKAWA PREFECTURAL NURSING UNIVERSITY

看護学部 看護学科

〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319
URL <http://www.ishikawa-nu.ac.jp>
E-mail office@ishikawa-nu.ac.jp

大学の主な動き

第1回卒業式



平成16年3月14日（日）に、本学講堂において第1回卒業式が行われ、第一期生84名（女子79名、男子5名）の皆さんが卒業されました。卒業証書・学位記授与の後、学長式辞、谷本石川県知事の告辞、向出県議会議長からの祝辞が贈られました。在学生代表の北國友美子さん（3年）の送辞に対して、卒業生代表の井上智可さんが答辞を述べ、最後に音楽サークルによる合唱にあわせ卒業生を送りました。



式 辞

本日、石川県立看護大学の第1回の卒業式を挙行するにあたり、卒業証書・学位記を授与された84名の卒業生の皆さんに心からお慶びとお祝いを申し上げます。

本大学は平成12年4月に開学した新しい大学であり、皆さん方には、第1期生としての誇りと責任感を持ちながら、後輩の模範となるべく、学内外での勉学・実習に意欲的に取り組まれたことに対し、深く敬意を表します。あわせて、今日の日を心待ちにして、支えてこられましたご家族の皆様方に心からお祝い申し上げます。

また、これまで本大学のため心血を注いでくださいました谷本知事さん、温かく支えていただいた向出県議会議長さん、本日も臨席を賜りましたご来賓の皆様方、かほく市をはじめとする県内市町村、実習先の病院や施設など、本学の教育にご協力いただきました多くの関係各位に厚くお礼申し上げます。

さて、今日、まわりを見渡せば、少子高齢社会が進展し、がんや生活習慣病、痴呆性高齢者の増加等疾病構造の変化がみられ、臓器移植や遺伝子操作による最先端の医療等、高度な医療技術が進展しています。一方で、人々の医療に対する問いかけや厳しい目とともに、健康な生活への意識の高まりも見られます。

さらに、20世紀末から21世紀の始まりの中で、アメリカや世界のいくつかの地域で見られる悲惨なテロ事件、エイズやSARS また鳥インフルエンザ等のような新興感染症の蔓延、子どもの虐待等、人々の生命や暮らしを脅かすような事件が頻発しています。

本学は、生命の尊厳や人々の痛みや苦しみを真に理解できる豊かな人間性ととも、専門的な職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に寄与できる看護職および看護指導者を育成することを教育理念としていますが、この理念が発揮されるのは今後の皆さんの活躍にかかっております。

看護の基本は、かつてナイチンゲールが述べているように、患者の生命力の消耗を少しでも少なくするようにさまざまな側面から援助する事であり、またその生命力をさらに強くするような支援であります。そのためには「いのち」の大切さと生活の質の豊かさを感じ取れるような看護を提供していくことが肝要であります。

これから社会に巣立っていく皆さんが看護職になるに際して、心に銘じて頂きたいことを3点、はなむけの言葉として贈りたいと思います。

一つは、我々の取り巻く環境の変化や医療現場で求められるニーズ、特に健康をもとめ、病に苦しんでいる人々のニーズに敏感に反応し、それを受け止める感性と対応能力をしっかりと持っていただきたいこと。

二つ目は、看護の仕事にあたっては、医師をはじめ多くの職種の方々との緊密な連携のもとで、看護職としての独自性を発揮していただきたいこと。

三つ目は、卒業証書・学位記を取得したからといって、これで終了するのではなく、専門職として、常に最新の知識や技術を得るためのたゆまぬ研鑽を積んでいただきたいことであります。

終わりに、皆さんの将来に声援を送るとともに、広がりゆく未来に大きな期待をいたしまして、私の式辞といたします。

平成16年3月14日

石川県立看護大学学長 金川克子

卒業生の言葉



4年間を振り返って

穴戸 晴香

「看護を学びながら自分自身も一人の人間として成長していきたい」と入学直後のオリエンテーションで目標を掲げた日から、もう4年が経とうとしている。

そして今、これまでの日々を思い返すと、自分自身や一つ一つの出来事に対して自分なりに精一杯向き合ってきたことが私自身をほんの少し成長させてきたのではないかと実感している。そしてこの4年間の出会いと経験は、人を看護することの素晴らしさだけでなく、人と出会い、そこから何かを学ぶこと、そして支え合うことの大切さを私に教えてくれたように思う。あっという間ではあったが、大学生活4年間はとても充実した日々だった。

今、私は看護師としてのスタートラインに立っている。大きな自信と勇気を持って一步を踏み出していきたい。そしてこれからも自分自身をしっかり見つめながら、そして患者さんをはじめ、これから関わっていく人たちとの出会いの一つ一つを大切にしながら、患者さんのための看護をしていきたいと思っている。

最後に、看護を共に学んできた仲間や先生、実習で出会った患者さんや看護師の方々…出会った全ての人たちに「ありがとう」を伝えたい。



卒業を迎えるにあたって

瀧川 久輝

卒業を控えた今の気持ちは、「もう少しここで学びたい」と「早く現場に戻りたい」が半々といったところでしょうか。編入学からの2年間はまさにあっという間でした。臨床での疑問やこれからの目標に向けての準備、自分を見つめなおす作業など、入学時に抱いていた期待を十分に満たすには時間が足りなかったというのが正直な感想です。もう少しこうしておけば良かったな、という反省もあります。しかし、大学で学んだことは間違いなく自分にとって価値があったと実感しています。それは、専門学校には無かった領域についての知識を得ることができたり、ひとまわりほど年の違う仲間との交流も良い刺激になったからです。また、この大学に来て生まれて初めて、心から尊敬できる教員にも出会うことができました。新たな知識と有効な刺激は、私の看護に対する興味と関心、使命感をますます高めてくれました。卒業後は臨床に戻ることにりましたが、ここで得たものを発揮して、入学以前の自分以上の看護が実践できる自信がありますし、課題もある程度明確になっています。ここで出会った仲間や教員と、これからの看護を築いていくのだと考えると楽しみです。そして臨床で働く仲間にはぜひ大学で学ぶことを勧めたいと思います。得るものは本当に多い。失うものといえば、多少の貯金ぐらいのものですから。

卒業研究発表会

卒業研究は、「研究の科学的アプローチを理解すること、研究的な態度を修得すること」を目的として、4学年の4月から12月にかけて、一人一人が一つのテーマを持って取り組むものです。3年の研究方法論の講義を基盤とし、担当教員の指導の基に、自ら考え、文献を集めて読み、研究計画をたて、フィールドへ出かけてデータを収集し、さらにデータ分析、考察、論文としてまとめるという一連の作業は、初めての学生には大変なものであったと思います。

今年度は、教員のテーマ領域を学生に提示した後に学生の希望領域を募り、早々に担当教員を決定し、卒業研究をスタートしましたが、4年前期は卒業研究と並行して地域看護学実習Ⅱと在宅看護学実習が行われますので、研究テーマの選定から研究計画の検討、フィールドの決定、研究の倫理面の審査などの前半の研究活動はかなり厳しい日程で進められたと思います。しかし、学生達が情報処理室のコンピュータに向かっての姿や、10月頃には夜遅くまで教員の研究室で指導を受ける姿がよく見受けられました。このような多くの努力が実り、12月には卒業研究論文集が発行され、12月22日には卒業研究発表会が本学の4ヶ所の講義室で、39名の学外からの参加者（フィールド施設や実習施設の方々、本学非常勤講師など）を迎え、開催されました。電子媒体などを使い創意工夫された発表や生き生きとした質疑応答が印象的でした。また、論文集の発行や発表会の準備においては、21名の学生委員が活躍しています。

卒業研究の指導を通して、本学に入学したばかりの初々しい顔の面々が、一抹の不安を抱えながらも確固たる（または秘めたる）意思をもった凛々しい顔をみせるようになったと感じさせられました。



大学祭

平成15年11月1日～2日に第4回の看大祭が開催されました。今回は「愛 have a dream」をテーマにバンド演奏や模擬店、お茶会等、多彩な企画が催されました。2日目には看大祭らしく、健康教室や献血のボランティアも実施され、予定を上回る多数の参加がありました。



退官記念講演会

3月末をもって本学を定年退職される木場清子教授の記念講演会「医療・教育現場におけるチームワーク ―時代の変化と心理臨床―」が3月6日(土)に本学大講義室で開催されました。

休日にも関わらず、多数の学生・教職員の参加があり、活発な質疑も行われました。



新任教員紹介



健康科学講座 教授 木村 賛
(平成15年4月1日 着任)

人類学とは

我々自身のことを知りたいというのは、個人についても、一つの社会単位についても、人類全体についても、ヒトがどうしても持ってしまう欲求のようです。人類学とは我々ヒトが現にどのようなものであるのか、どのようにしてそうなったか、はじまりはどうなっているのか、を考える分野です。私はとくにからだがどのようにして今ようになってきたのかに関心があります。ヒトがどうしてほかの動物とちがっていまようになったのか、すなわちヒトのはじまりとその後が変わってきた結果としてのからだつきを知りたいと思うわけです。いま生きている我々のからだつきはすべてこの進化の結果として存在しています。うまく働くところも、矛盾のあるところも、形も機能もすべてです。なぜヒトは二本足という独特の歩きかたをするのでしょうか。なぜ赤ん坊も歩き出すのでしょうか。なぜヒトは生殖能力がなくなったあとも長生きするのでしょうか。なぜむかしのヒトといまのヒトとのからだつきはちがうのでしょうか。これらのなぜなぜにすぐに答えることはなかなか難しいことですが、それらがどのようになっているのかを一つ一つ詳しく調べて考えることを続けて行きたいと思います。



健康科学講座 助教授 大木 秀一
(平成15年10月1日 着任)

ごあいさつ

はじめまして。昨年10月から本学に赴任いたしました大木秀一と申します。これまでには、国立と私立大学の医学部、国立大学附属の病院で研究と教育に関わってきました。看護系での講義は大学院時代からかなりやっています。ですから看護学生に教えること自体には特別な違和感はありません。本学では、公衆衛生学と疫学などを担当します。専門は遺伝疫学と言う分野です。これはヒトの集団における疾患や健康事象の遺伝学的な背景を明らかにし、遺伝要因と環境要因との関わり合いを探索し、疾患の予防や健康の増進に応用する分野です。集団遺伝学と疫学の近接領域になります。趣味の一つは国内外を問わず観光や旅行することです。忙しくてなかなかかける時間はありませんが、そんな中でも金沢市は好きな場所の一つで、これまでも何度となく訪れています。しかし、まさか自分が住むことになるとは思いませんでした。大学も、最初に来た時こそまわりに何もなくてびっくりしましたが、今では通勤にもなれ、能登半島の海岸線の風景をそれなりに楽しんでます。余裕ができたらゆっくりと北陸の自然や文化に触れてみようと思っています。これからもよろしく願いいたします。

中国からの研修生の感想

孫 皎



私は2003年4月に研修生として日本にきましたが、中国ですべて老年病棟で仕事をしているので、一年間に日本の地域看護と老年看護を勉強するだけではなく、老人福祉センター、社会福祉センター、ことぶき園、金沢大学医学部附属病院へ行って見学しました。日本と中国のシステムの違いに気づきました。中国と日本は兄弟の国ですので、日本の文化と風俗が中国と深く結びついています。私は去年の8月に高松の夏祭りに参加しましたが、そのときに初めてゆかたを着て日本の町民と一緒に踊ったり、花火を見たり、美味しい食事を食べました。楽しかったです。後は「国際理解料理教室」の講師として、中国の餃子と炒めものを紹介させて頂いて、みんなが餃子の皮を作ることに興味を持って愉快的な雰囲気でも過ごしました。私にとって地域で様々な人と出会い、大切な経験をする事ができました。これからも日本の先進的な看護への学びを深めていきたいと思っています。

キャンパスライフ

一年を振り返って



1年 谷崎 香織

入学してから、あっという間に1年が過ぎてしまいました。この大学での様々な出来事とともに、確かな学びの手ごたえを胸の内に感じています。たくさんのお会いがあり、仲間や上級生、先生方に恵まれました。そしてそのような暖かで頼れる人間関係の中、1人では困難であった課題をクリアでき、今日の私があると実感しています。12月の特別養護老人ホームでの実習はまさにそれです。想像以上に何も出来ない自分にとまどいながらも、何とか4日間を乗りきることができたのは、仲間や先生がいたからに他なりません。また、実習の経験は現場を通して、対象者や援助者側からの気持ちを考えさせてくれ、自己を見つめる機会も与えてくれました。そこには、自らが積極的に参加して考える姿勢が求められ、「看護」とは何かを問われました。その時点で考え得る精一杯の答えを出しましたが、今後、私の「看護」観は変わっていくことでしょう。それがまた楽しみでもあります。

2年目は看護の学びがより専門的に深まっていきます。1年目の学びをベースにしながら、更なる「看護」を模索していきたいです。

2年 梶 萩乃



平成15年度は、新しいことに挑戦した年だった。まず、音楽サークル1年目として学生大会から始まり夏祭りや看大祭、施設訪問や卒業式等とステージを踏んできた。自分たちにできる最高の演奏を、そして観客にとっても良いものを目指してきた。私は、サークル代表として活動することを通じ、自分という人間を見直すことができた。この1年を無事終えることができたのは、一緒に歌った人や聴いてくれた人、そして日頃の活動を支えてくれる人たちのおかげだ。この場を借りて感謝の気持ちを伝えたい。

また、夏から要約筆記奉仕員基本講座に通い始め、現在では要約筆記サークルに所属し活動をしている。要約筆記とは、難聴者や中途失聴者等に対して文字で情報を伝えることであり、OHPやホワイトボードなどを用いて行う。ノートテイク（筆談）も要約筆記の一つの手段として用いられている。上達への道は実践を積むことであり、要約力や漢字力も必要であるので、日頃から意識することが大切だと学んだ。要約筆記に限らず音楽サークルでも、たくさんの人との関わりから多くのことを得た。また、この学びはすべてが日頃の生活と関連していると感じる。これからも要約筆記や音楽サークルを通して自分の成長へと繋げていきたい。

実習をとおして

3年 清水 沙也香



私は昨年、4年生が第Ⅴ段階の実習をされているのを見て、来年は自分たちだと思いながら自分にできるのだろうかという思いを抱えていました。今実際に実習を終えて、本当に毎日過ぎるのが早かったと感じました。患者さんと関わりながら"この方に自分は何ができるのだろうか"と自問し、自分が行っていることがこれでいいのか、もっとこの方のためにできることはないのか実習グループの仲間と相談し、看護師さんや先生にアドバイスをいただきながら、患者さんに寄り添いたいと思い、毎日を過ごしていたのではないかと思います。実習中、自分のあまりの不甲斐なさ、力不足を感じ、私が看護の道を進んでもよいのだろうかと思い、悩むことも多かったように思います。しかし、患者さんとの出会いを通してやはり"看護っていいな"と感ずることができ、患者さんにやさしい看護師を目指したいと、改めて思いました。

また、実習を進める中で、自分を支えてくれる人の存在を感じ、実習グループの仲間、友人、家族、先生方など、私の周りには大切な人がいること、支えられていることを、これから看護をする上で忘れずにいきたいと思いました。

それぞれの実習施設で出会った患者さんは、これからも学生の心の中で生き、私たちを支えてくださるのではないのでしょうか。



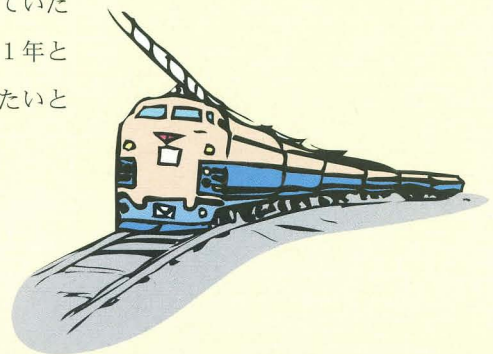
旅をとおして

3年 松本 陽子



私は旅行が趣味なので、病院で勤務していた頃から暇を見つけては、いろいろな国を旅しました。その旅先でいろいろな国の若者達と出会います。気が合えばそのまま何日か一緒にその国を見て周ったりもします。その間、様々なことをお互い話し合うわけですが、彼らは実にしっかりと、自分の国の文化や歴史、政治経済、さらに自分の将来について語ります。そしてそれらに対して自分はどう考えて、どう行動していくかということもしっかり持っています。

これは私にとって大きな衝撃で、焦りを感じました。私が大学に進学しようとした理由の1つはここにありま。またある時は韓国人学生に「これからは自分達の手で日韓関係をよりよいものにしていこう!」と言われました。いったい私に何ができるだろうか、否応なしに考えさせられました。私が今まで学んできた看護という分野を活かして、何かできないだろうか。その方法は現在も模索中ですが、大学で看護のみにとらわれず様々なことを学ぶことで視野が広がり、可能性も広がったと思います。またこれまで全てが受身で成り立っていた頭を、少しは能動的に使えるようになったと思います。学生生活は残り1年となりましたが、ここで目標を見直して、限られた時間を有意義に過ごしたいと思います。



図書館から

図書館の利用について

平成16年4月、大学院が開設されるにあたり、新しく大学院生として入学される皆さんへの図書館利用の内容が決まりました。研究条件を整えるという意味からも重要なことですが、貸出冊数が10冊、貸出期間は1ヶ月とします。

また、土曜日の図書館利用でご希望の多かった「貸出」を4月1日から実施することといたしました。13:00～17:00まで開館します。図書資料の閲覧とともにご利用下さい。教職員・学生だけでなく、学外の一般の利用者に対しても同様です。

さらに、開学以来順調に購入を増やしてきた雑誌数を、大学院の開設に合わせ、来年度は185種(予定)まで増やします。

なお、近い将来への展望として、洋雑誌の電子ジャーナル化により、学内どこでも文献が手に入るシステムづくりも検討していきたいと思っています。

今後とも附属図書館の活動にご理解とご協力をお願いします。

4月1日より
土曜日にも図書の
貸出がOKになり
ました。どうぞ
ご利用下さい。



地域ケア総合センターから

平成15年度は以下にあげる研修等を実施いたしました。

■公開講座

公開講座は「今、かけがえのないあなたに」をテーマに、子どもたちや中高年の健康や保健の課題をとりあげ6回開催しました。外部講師として石川県済生会金沢病院副院長の川浦幸光先生にもご担当いただきました。延べ440名の参加がありました。

■看護・介護講演会



講師にホームケアクリニック川越院長の川越厚先生をお招きし、「在宅でのホスピス・緩和ケア」をテーマに講演会を開催しました。一般県民の方々、看護・介護専門職の方々等150名の参加がありました。

■県民の保健と看護を学ぶ講座

生活の中での課題から“高血圧の予防”“赤ちゃんの世話”“会話など人間関係を円滑にするやりとり”などについて講義と実技を取り入れ3回開催しました。



この他、専門職を対象としての研修で、看護師等養成施設職員研修1回、看護管理者研修2

回、高齢者介護施設等職員研修1回、保健福祉センター技術職員研修4回、等を開催しました。

■国際交流の促進

看護国際交流の集い、国際交流講演会、英会話の集い等を行いました。平成16年度は、ワシントン大学との学術協定に基づく学生の海外研修、さらに、ワシントン大学の先生による国際看護学術講演会が開催される予定です。

発行 ● 石川県立看護大学広報委員会

〒929-1212 石川県かほく市中沼ツ7番1
TEL 076-281-8300 FAX 076-281-8319